
向日葵の花束

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

向日葵の花束

【Nコード】

N5221K

【作者名】

ゆう

【あらすじ】

十九歳のレオは、田舎にある実家へと帰郷した。

彼が帰りがかった場所、ほんとうに求めていたものとは…。

実家に帰郷するのに俺は人一倍大変だと思う。

超が付く田舎だからだ。

田舎に居る両親に急に逢いたくなつた。

しかし東京から新幹線でこの田舎の奥にある実家まで来るのに、かなりの苦労だ。

早朝の暗い土砂道は寒いし歩くだけでも大変だ。

昨日の夜に新幹線の窓から見た景色は綺麗な星空だったが、駅に到着して朝になるにつれていつのまにか酷い雨になっていた。

靴は水を吸い込み重いだけになる。既に使いものにならなかった。俺は雨で滑りながらも速足で歩く。

丘の上の方に在る、俺の実家。どろだらけになりながら、何度も滑って転びながらもやっとの思いで登りつめた。ドアの前に立つと、必死で扉をノックし続ける。しばらくすると母さんが顔を出した。

「おかえり。」

「ただいま」

「久しぶりだね。寒かったでしょう。温まりなさい。ほら、タオル」
「ありがとう。久しぶりだね。」

なんだかホッとした。

「しばらく見ない間に、また背が伸びたね。」

おいおい、俺はもう十九だ。そんな子供扱いするなよ……。苦笑いしたが、母さんは気にする様子もなく嬉しそうに笑った。

土色にそまつたスニーカーを脱ぎ捨てタオルで頭と足を拭き、木の椅子に座った。

「親父は居るの？」

「居るよ。仕事で疲れて二階で寝てるけど。」

俺は木の椅子に浅く腰掛ける。軋む音が居間に響いた。

「冷えたでしょう。ココアでも飲む？」

「…ありがとう」

母親にとって子供は幾つになっても子供のまもらしい。

俺はココアよりアイスブラックコーヒーのほうが好きだ。特に夏は。でも俺は黙って熱いココアをすすった。身体が芯から解されていくのがわかった。

安堵と共に大きなため息をひとつつくと、なぜか母さんは心配そうしていた。

ガタン

風が窓を揺らした。

外で冷たい雨が打たれ続けた。

「実は俺、久しぶりだったから道を迷っちゃったんだ。そしたら知らない子供が○×町からうちの実家までの道を知ってたみたいで。聞いてもないのに、教えてくれたんだ。…変な話だけど。」

「その子がこんな場所を知ってたの？」

母さんはぽかんと口を丸く開けた。

「どんな子？」

「知らない。顔や声までは憶えてるんだけど………その子、名前を名乗ったんだ。だけど、その名前だけがどうしても思い出せなくてさ。」

母さんは不思議そうな顔で、頬杖をついた。

「あんたの事知らないの？土砂降りの中こんな場所に子供なんて居ないはずなんだけど…。ずいぶん妙な子だね、その子。迷子かな…。」

母さんが一本のろうソクを持ってきた。

風の唸りと同時に炎の灯りが小さく、揺れた。

小学生の頃、こうやって怪談話をした。だけど俺はみんなの傍で聴いてるだけだったけれど………昇ることもできない墜ちることもで

きない魂が、ゆれるんだ。

赤い炎が、みんなの黒い瞳を燃やし続けながら…。

そんな事を思い出しつつ、どこか重苦しい気持ちで俺はいきさつを語りはじめた。

「夏からずつと変えてなかった布団が、小さくて寒くてね。古いアパートだから、暖房も何も無いんだ。

冷たく冷えきった足がかじかんできた頃、

俺はなかなか眠り出せなくて寝返りを打ったんだ。今日ほどじゃ無いけれどひどい雨の日だったよ。

そのとき、夢をみたんだ。その夢に“少年”が居た」

「今日会った子？」

「…うん。不思議だよね。」

(……君、誰？)

「夢の中、俺が訊ねると、その子供は偉つそうに言ったんだ。」

「……だから何度も言わせるなよ。俺とお前はいつも隣り合わせだ。」

「俺の前に立ちはだかつて、独語のように、身長は俺よりも低く、小学校の高学年にも、中学生にも見える。そのくせ妙に低い声が印象的な……、青年、というか少年……というべきかな。

髪は長くて、肩くらいまでであった。今時古びたレインコートを着て、薄笑いを浮かべた色白の気味の悪い子供だったよ。」

「よくもまあそんなに鮮明に憶えてるもんだね。」

母さんは感心したように云った。

俺は話を続けた。

「狂気と残忍に満ちた子供が微笑ってるようにもみえた。気味が悪かった」

そう。しかし“少年”とは以前もどこかで出逢っていた気がする。

その疑問だけが消えなくてもどかしかった。

確かその夢をみた時、俺は……都会のメタリックで機械的な街並みや、我先にと他人を踏み台にする人々の無神経さに疲れ果てていた。鬱だった。

だから安らぎを求める。

俺は帰りたいかったんだ。この場所へ。

「俺には余り友達がいらない。皆表面上だけだ。学校でだって“友達”じゃないんだよ。」

あいつら俺を利用しようとしてるだけなんだよ。なあ、そうだよな

――」

俺は憤り興奮気味に話をした。

「あんたは、この家の長男なんだよ。そんな弱虫に育てた覚えはありませんよ。」

昔からの母さんの口ぐせ。懐かしい。

そう言えばこんな時になぜかこんな話を思い出した。

自ら死を選んだ人間の魂は、この世に留まり続けるという、永久に

それはまるで合わせ鏡のように。

無限に無数に己を見続ける。向き合う。

それが、自殺した人間への、罰なのだと……。

そうだ、なにか思い出す……遠い遙か昔の事……

ちょうど今日みたいな雨の日だったような……。

「あれ……？俺、」

「まあまあ、落ち着きなさい。お菓子でも食べなさいな」

「……………」

母さんがせんべいを差し出した。

ココアにせんべい。

そうだ……母親は昔から献立を考えるのが苦手な人だったよな。

俺は無心でせんべいを噛み砕いた。芳ばしい香りが、鼻先を包んだ。これだから、女ってものは面倒くさい。

俺は勢いよく椅子を立ち上がると自分の部屋がある二階への階段を上った。

本当に久しぶりだ。

何年振りだろう。

みしみし、という階段の音と懐かしい木の湿ったにおいが、なにかを訴えている気がする。

二階には父さんの部屋への扉があつて、向かい側に、俺の部屋への扉がある。廊下はおそろしく細くてせまい。天井など僅かに雨漏りがしている。

俺は、自分の部屋の前についたところで立ち止まった。なにかが俺を引き留めた気がしたから。

勇気を出して親父の部屋の扉をノックしようとしたが、俺は躊躇し手を引つ込めた。

その時、

暗闇で写真のフラッシュが光り、そしてずっとなくしてたお気に入りパズルのピースが意外な場所から見つかったような、壊れていたオルゴールが音を思い出し、ふたたび哀しいメロディを奏でたような、

なんとも言えない嫌な記憶が、俺の脳の表面を生ぬるく撫でていった。

俺の頭の中であの不思議な少年が、映像として浮かんでいた。

本当は…

本当は……

親父——……

その時、俺のトレーナーを、誰かが引つ張った。

（うわっ?!）

振り向くと其所には
あの、少年が。

俺は声も出なかった。

恐怖と驚きで足がすくんだ。

少年は雨水でびしょぬれたみすばらしい恰好で、不安を真つ黒に塗りつぶしたような丸くて大きい眼を、黄色いレインコートまなこの奥から覗かせている。

「やあ」

相変わらず子供らしくもない低い声で言う。

どこかで聞き覚えのある、懐かしい声だ。

俺は薄暗い廊下に掛けられた時計を見た。

午前、六時十一分。

針は動いていない…

（あれ？この時間って、確か―…）

「思い出したの…？」

少年が呟いた。

雨は相変わらず降り続けている。

雨の音。哀しい記憶―…

「ここはお前の居場所じゃない。お前が望むから、案内してきてやったけど。でも本当に行くべき場所が、あるだろ？」

そう言つて、少年は笑つた。

（なにを言つてゐるんだ？

この子供……）

「バイバイ。」

少年が消えると、俺は雨の中に居た。

焼け焦げた臭いがする。嗅いだことの無いような臭いだ。
気道は塞がれ瞼は開かない。

指は一本すら微動だに動かない。

俺は地面に倒れていた。

（あ…れ？）

そう、ここは俺の実家の前だ。

体が焼けている。

俺は雨水と油の水溜まりに沈んでいた。

身体中から煙が上っている。

人形のようなだった。身体が 硬直している。

俺ははつきりと思い出した。

東京から両親に逢いにこの場所まで来たんだ。
花束を持って。

七年前

俺が小学校六年の夏の日の出来事。

俺の父親は重い精神病を患っていた。

怒鳴り、暴れる。そんな親父を母は何年も必死で看病した。

でも

いつしか母も、看病に疲れてしまった。

やさしかった母親

元氣だった父親

それが最悪の事態となってしまったんだ……

俺が小学校に行くために部屋を出たとき、

うちの廊下で警察官がうろついていた。

『おまわりさん、どうしたの?!』

『きみが玲音^{れお}くんかい?』

俺は警官の表情を見るなり悟った

警官の質問には応えずに、せまい廊下を駆け階段を下りると

崖の下、土砂にまみれた両親の車が、見つかったのだと……

自殺だった

その時、時計は六時十一分を指していた。

母さんは、

あんたはうちの長男なんだから、父さんのようにはならないでね
といつも口癖のように言っている

非力な俺は、最期まで母親を助けてやれる事も親父を救う事も出来
なかった

もちろん俺は家には居られなくなり、孤児院に引き取られた。
そして過酷な生活が待っていた。嫌気がさすのにもそう時間はか
らなかった。

母さんまでを道連れにした親父のことが、ただただ憎かった

親父と母さんは、自ら命を絶った者の罰として永久にこの場所に居る

俺は逢いたかった

どんな手段を使っても…

どうしても……

俺は石油をかぶった。

小さな向日葵の花束に火が燃え移らないように気をつけながらライ
ターで火を点ければ、たちまち炎は全身に広がった

そうして子供の頃の俺に誘われて“実家”に帰れば、幾つになっ
ても弱虫な息子の愚痴を聴いてくれたんだ。

ザア——…

ピチャン…

気づくと、遠くのほうでまたあの少年が立っていた。
沈黙を守り続けていた。

レインコートの陰の下で歪む口許が妙に生意気な、
こいつは、
…俺。

非力で弱虫で無力な子供の、俺。

この少年の名は、
水島玲音。

俺は全てを思い出し理解した。

（子供の頃の俺が、親父と母さんに逢わせてくれたのか……）
求めるのは安らぎと、在るはずだった幸せ。
けれど景色は何時だって、雨のままで。

俺の中で時は止まったままだ。
両親が自殺をしたあの夜からずっと、ずっと。

俺は縛られ抜け出せない。幸せだった家族の記憶から。

命日の今日は、両親がずっと大好きだった、向日葵の花束を
捧げてやるつもりだった

ありがとう、母さん。…ごめん、親父。

向日葵の花弁が、燃えている。

俺は正気に戻った。

救急隊員と町の人々が数人がかりで俺を救急車に運ぶ。
全身に大やけどを負った俺は口を開く事すらできなかった。

（止めを刺してくれ…

苦しいんだ。

疲れた。もう疲れたんだよ…）

向日葵の花弁が、燃えおちていく……

雨の音が、こだまする——…

俺の帰る場所に 安らぎを……………

（後書き）

久々に投稿しました。

ここまでお読み下さり、有り難うございました。 m ((m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5221k/>

向日葵の花束

2010年10月28日08時11分発行